茅ぬの浦の風光はいかに。

博覧會は棟数みつ、ひとつを工藝館、ひとつを農林館、機械館、小屋館、ひとつを美術館となせり。今一つ動物館なれども、五月百ようなりしは開かず。おの小路日午前十時より六時まで、錦繡の中をとりのなりとて、楓か撫かれ形容と思ひしまれ、五百余人と一大事なり。黄金堆裏も錦繡の中もおろかなること、人工の奥妙を極めたる、大野山ならねど、これもいくらかさる工藝なり。御地の鉄器見事なり。大釜二つ、これまた闇魔も平降伏首なるべし。

陸通も入るあり、精巧なるものなり。工藝館にはうつ書なるべし。五穀はうつ書なるべし。五物布地

四月をまわりつ、農林館みるべし、出品はうつ、寄大審村一つ二本ノ安いものと、特約せんとなれども、しかるべし。

宣言既に御約定所みとの、農林館飾て、機械館みるべし。

ゆく小ヵ電氣の大仕掛、衆々の音は口と口、かぞ里一百も来たる地す。小屋館みるべし、砂糖の中に鯉、鮒なるもの所所せる、珍しかも。北海道の塩鮭、尾土まとて安價なるふ、ふく、京都のこんぶとも出丁来上上の那物なるべし。

これ一先つ体感して、美術館なる竜の嘯小屋見る、巧妙なり、鯉の玉み電氣燈をともすなど、明治代なりしは此手ぬ仕掛なるべし。二竜の玉を争ふよき趣向なり、周囲のたこき、御影石おおぬもて巧也、美を尽し美を尽す美術館なるべし。美術を知らぬ小小もおもはず知らず、うまいく、うまいの更なふ、てすれ行く中、今のほ意をうきなるべし、来僊君小図、楓園

絵ゑがき。美術を知らぬ人にも、おもはず知らず、うまいのうまいなどいひてすぎ行く中、今の世豊をきなるを、米僊君小図、楓川居士（元家）討滅の図、橋村左雅邦氏、竜虎の図、左士羅漢の図、

拓年、景年、玉堂氏の図なるき猿み雅邦氏竜虎の図は 称代の逸色 紙 色氏墨躍る、真を敷（敷）て清古なり 臥竜梅の古木 虎を画きて歌みあり、虎を画きて歌みあり。

虎を画きて 筆力の雄健なる 雲白子の絵画中氏の

右の出つるものなり（これを今の時好）如不一等賞を得られ

（これも今のひいき）士羅漢 紙 逸なるて 銀行 銀行を出るおれし。 銀行 銀行 二階 出るて、いつにも住なるものもと、

ゑがきてえちとお担来と申すべし。さて銀行も終て銀行に入れば、出品

の到着せざるものいと多なり。 油絵の裸体美人あり（代表、三千円とあり）

等を見れば、真を催しなり、蓋裸体なるゆゑみ所なり、真態度、

真仏戸の色の真を誤りたれども也、一個の美人（？）が鏡に向ての

同 仏みの陰アを工み陰敬せるれども、真態なるもかの人は雅み、

もかくしなやかみ、もかくしなやかみ、美人らしく、あるおなり。

仏戸の色を色なるかなり、生理上より論ずれば死体の字色にて

仏体の色みなるず、景色絵の如きなるもなん能はざる所なり能

ゑれなるそれて工夫のあるそうなる事也。忘み角僧の眼孔の能

なる如みは楽みを表せんと欲するも楽成を表する能はざり。

体裸美人は高雅を最要となるず、例（美なること能、真態な

うて母体なるなり、者匿み敬て長らぶる也。真態なるかも者

雅、真熱のいかし紙陰すれば元美術なる絵画なれ、海の美人

れ（ちかも臨つきのおらーき）鏡み劃するおのそれ、未だ者ゆとるあかるず

金うも真図業を選らめ人か、例（写真を失ふるもせよ、海濃

はたつかな、松掛緞銃して、春月脚なる所、一個の海士美人を

歌せんと、如何、仏色を出るなるなれも、或る場合みたて又天瑕

北なり、仏意せざる（ふたり、六人は往時、「蝶」の裸体画、「風景」

はたつかな、松播鰹節にして、春日勝なる所、一個の海士乗人せ
ず、如何、安色一面に出るなる能も、或る場合みたて又天瑕
北なり、感意せざる（あらず、六人は往時、「蝴蝶」の裸体画、「風景」
の彫刻を見て其意匠に感ずぬ。今や内国の美術は蝶蝶
其出色此人の如し、日本の新美術を如何せむ、審査官諸氏、
何ぞ其意匠なる。六人を微駆微尾かる油絵を感服する
能はざる也（以言を新し統）屏風は五ケ月のあり、永出
十品等價のものなり。撰する、美術を東都西都に出
他の量を数量とする、而して東都は絵画の如を得、西都を
彫刻の如を得、公持他あるとなるべし。美術観作て、出能ぬ。
然して多数を多数なるしかど、今の不意なる十分の満足を得る
能はざるべき、もとより今を農工義作の美みたて門外漢なり、黄口
の嘴喋すべきの所なるし、其意意を引きなるを、きく者と
知すべきのみなして、美との巧とはしむるのかきを如何、美術の
開発なる京都を待みて、月みす其美を使きなるを故の、工藝の
地方なる京地を仕事しうるを知を合ひたるなる故の、
発ふむ、然小ともあれ、官祝なるなるべし、「まて見小むれほど
ひなれ不二の山」と今みたて其意を知る。

紀念祭の奏を四月の二十日に行なるべし。石天門、自鹿橋、其
竜橋、大拝殿、雅楽奏なり、和のつの月を以て千百年の昔みを
ちの一うむ。

大文山は「ヒーロー、サンライズ」の大名称を、新たに新意の方
美神の御化意を為せん、ちょいとうまくいかなくても
年詩を誘脚をこの、僕は年庚祝を踏む、六人思ふ、
るめつみ、詩形みたて六人の七、工と賞用すも立かく詩調の為めつみ

詩調

詩想、詩歌、詩形、の外に詩調とは必要なるべし。近時和歌
する調をやかましく言ひ、新解釈みたて未だ三をきの下、六人思ふ、
年詩を誘脚をこの、僕は年庚祝を踏む、六人思ふ、
るめつみ、詩形みたて六人の七、工と賞用すも立かく詩調の為めつみ

俳詩は詩脚をこのく、俗語を用ひ、又全く其詩調を捨てゝ
ゐるのみ、詩形のみたて共人の七五を変用するも亦詩調の為めのみ
なる詩語を用ふる場合にて、其用語と其詩調の調和をはかるものなり。
俳詩の「俳諧」なるものゝ、詩語として用ゐ難き場合に用ある
ものゝみ、共異はいふと思はるゝか。
新鮮なる語をふゝめあり、永寿な無用のことなるべし、日本語の
特徴として、こゝ、なり、て、み、等の言葉を以て結ぶこと常なり
なるべく歌をふまざるも、
自然の語をなす。永古来無歌の形
（櫻埜氏無歌非俳諧なる説）又詩とすべき美調の為めなれば、
同さ「俳諧」なれば、故て歌を用ゐるを要せざるべし。共異いかに、
無俳諧の語をつゝりたるもの自然と歌なるべきなれば可かるべし
詩歌は所謂雅言をもてすること、適当の標準なるべし、換言すれば、うん、
うゐ、うるけく、等の語を標準となすべし、俳諧の俗調なるもの、
禁決、俗決、半決なども用ゐべきなり。共は君はいふた、
さもと結ぶは、古語を拘泥するもの不可のなり、例へば無論、「あるべし」を
「あるべ、といひさ和びきを「さらく」「ひき」「恥かきを「やさしく」
なといふ必要なり、必要なきのみならず、其意義を誤るの虞あれば
大なる害あり、要するに詩歌はあくまで雅なるべし。雅なるとは
他の語をもてなすべきなり。
秋を樂天的の場合なりとて海者あるべし。成程秋を
其国方地方として「さびしき」ものなり、「さびしき」とあるとあつて厭世
の意なるべし、樂天的時の「さびしき」の感あり、善しの「さびしき」も亦美
感の一なるべきなり。
日本九景海の景、「閑栖の代表者を秋なり」と、
で閑栖なり、陽炎の如しなり。
芭蕉撰集する。面白きことあらば一書をなす。

暉